

齋藤幸平「人新世の資本論」集英社新書

本書の初めの三分の1は、まともな議論である。

例えば、いまは「人間が地球を破壊し尽くす時代」で、「SDGsは、現代の大衆のアヘン」である（p. 4）。「資本主義が人間だけでなく、自然乾姜からも略奪する」とっかである。

その他多くの論者、理論を批判する。ノーベル賞のノードハウスは経済成長優先だ、とか、グリーン・ニューディール = 気候ケインズ主義を批判する。グリーン革命は、もうけよう、というもの、とか。

多くの人、著者齋藤は、言い過ぎではないかと云うかもしれないが、っだいたい正しい。ただし著者は温室効果ガスとしてCO2だけ問題にし、とりあげている。温室効果ガスはもっとあり、これは一面的である。

なお、いつも新自由主義だけを槍玉に挙げているのだが、経済政策として、自由主義→ケインズ主義→新自由主義と代わってきているので、自由主義、ケインズ主義も、問題である。

次の三分の一は、マルクスを扱っている。

マルクスは、ヨーロッパ中心主義から離れ、生産力至上主義からはなれている、というもの。そして環境問題をしっかり認識していたというものである。

しかし、それほどはっきり認識していたのかどうか、疑わしい。ただし、現在多くのマルクスの原稿が発表されつつあるので、何とも言えないかもしれない。

最後の三分の1、環境、平等、貧困の解決の方法を提案する。

結論としては、脱成長 Kommunismus である。

コモンの回復をせよ、ワーカーズ・コープをつくれ、労働と生産の変革をせよ、ケア労働の重視、フィアレス・シティ、バルセロナのヴィア・カンペシーナ、南ア食糧主権運動の紹介をし、こういうことをせよと述べる。ただし、著者はバルセロナの例をちょっとくわしく伸べているだけである。

脱成長 Kommunismus の柱として、1 使用価値への転換 2 労働時間の短縮 3 画一的な分業の廃止 4 生産過程の民主化 5 エッセンシャル・ワークの重視であり、これが結論である。

これらはとてもよい主張で、間違いのないものである。しかし残念ながら、実現可能性はほとんどない。一種の理想である。

多くの人（経済学者）は、本書をユートピアだとして非難するであろうが、非難する必要はない。ほぼ立派な議論である。人はユートピアをもっても罰は当たらない。